献呈の辞

武田信明

芦田耕一先生には、平成二十三年三月末をもって、めでたく定年を迎えられる。

先生は、昭和五十三年四月島根大学文理学部に赴任された。同年六月に、文理学部は法文学部と改組され、以来三十三年の長きに渉って、文字通り草創期から今日にいたるまで島根大学法文学部とともに歩んでこられたことになる。その間、専門分野である中古文学の研究でめざましい成果をあげられるとともに、東洋文学語学教室から日本東アジア言語文化と名称こそ変わったものの、いわゆる「国文」の学生指導においても多大の貢献をされてこられた。

多岐にわたる先生の研究において、あえて中心的なものを挙げるとするなら、まず平安期の歌人藤原清輔の研究であろう。その成果は『袋草紙考証　歌学篇』と『袋草紙考証　雑談篇』という二冊の労作に結実している。そしてもう一つは、近世期の出雲歌壇の研究である。これまであまり注目されてこなかった和歌発祥地としての出雲の重要性を先生は常々力説され続けてこられた。『出雲国名所歌集』の刊行に代表される出雲歌壇の詳細な研究は、先生ならではの業績として、今後の研究の礎となることは間違いない。

一方、先生は大阪人としてこよなく阪神タイガースと「駄洒落」を愛してこられた。その明るいお人柄ゆえ、教職員からも学生からも愛された先生の周りには、いつも笑い声が絶えることはなかった。「銚子に乗る」「一本でも日本酒」などなどの機関銃的な駄洒落の連続を拝聴できなくなることは、寂しさを通り越して哀しみすらおぼえてしまうのである。芦田先生、長らくご苦労さまでした。ありがとうございました。